

## 「あの日、東海村でなにが起こったか」

著：栗野仁雄

著者の栗野仁雄さんは、今年(2017年)3月のまちづくり講座の講師に来ていただいたジャーナリストの方です。講座の打ち合わせをする中で、この本を進められ、お借りして読みました。

今から6年前の2011年3月11日に、東日本大震災が起こりましたが、その時に、福島第一原発の事故があったことは、誰もが忘れられない事で、これからもみんなで考えて行かないといけない問題の一つでもあります。

そのわずか12年前の1999年9月に、茨城県那珂郡東海村にあった「株式会社JCO」の核燃料加工施設で臨界事故があり、被爆によって死亡者が出たことはあまり知られていないのではないのでしょうか？

今でこそ「原子力の取り扱いには危険が伴う」という認識が広まりましたが、今から18年前は、そこまでの危険性は、みんながあまり知らなかったのではないのでしょうか？

この本は、著者が1999年9月30日に、たまたま取材でJCOを訪れていた時に、臨界事故が起きたことで、その時の様子から、事故の原因、発生経緯、住民避難と屋外退避に関する行政の指揮や意思決定、住民の被曝状況の調査、健康障害への対応や経済的補償、事故の原因調査、などが取材を通して細かく記録されています。

6年前の福島第一原発事故の時も、必要な情報がどれだけ必要な人に届いていたのか？疑問に思うことが多々ありました。意図的に隠されていたのではないかと、思うようなこともたくさんあったように思います。

このJCOで起きた事故についても、著者が取材をする中で、同じように隠された事実があったそうです。

著者は、この事故の取材を通して、「なぜ起こったのか？」を知るために、著者自身も原発や放射能の問題について学びながら取材を続けて来られました。この本には、



その中で分かってきたことが、細かくわかりやすく記録されています。

書かれた当時は、東日本大震災前なのですが、著者はこの事故を通して「同じような事故を2度と起こしてはいけない」という思いからまとめられたと思います。

福島第一原発事故から6年経ちますが、今、この本を読んで思った事は、この事故に関わった人は、この事故を通して、原子力の怖さをたくさんの人に知ってほしいと思われたと思うし、同じような事故が2度と起きないようにという願いがあったと思いますが、事故は起きてしまい、その後の対応も、同じように必要な情報が必要な人に届いていなかった現状があったと思います。

福島第一原発事故に関わる本もたくさんありますが、その前に起きた臨界事故について知ることで、これからの原子力の問題をどう考えて行けばいいのかを、考える1冊だと思いますので、機会があれば是非読んでみてください。

